

農村家内工業の没落について

—アメリカ産業革命の1側面—

宮野 啓 二

I

アメリカの産業革命史を研究する場合、吾々はいわゆる「家内工業の没落」という問題を無視することはできない。と云うのは、産業革命は、一方において機械制大工業(工場制度)の成立であると同時に、他方においては、旧来の小生産者の駆逐・没落(小生産者層の分解)過程でもあるからである。そしてアメリカにおいては、この小生産者の駆逐過程は、すぐれて農村家内工業(household manufacture)の没落として現れたからである¹⁾。

それでは、この household manufacture とはいかなる工業であろうか。household manufacture なる用語は、すこぶる多義的な概念であるが、一般的には漠然と家内工業又は家内工業製品を意味している。R. M. Tryon によれば²⁾、household manufacture とは、自己の原料で家族労働により、自宅又はプランテーション内で自家用=非市場向に生産される工業製品である。これに対し、V. S. Clark は、自己の原料であれ、他人の原料であれ、外部市場(outside market)向の家内工業を household manufacture と規定している³⁾。このように、両者は、それが市場向生産(商品生産)であるか否かの点で対立している⁴⁾。

1) アメリカでは、熟練手工業者の独自の共同体たるギルド制は殆んど形成されなかった。それに代って農村家内工業が広汎に普及した。このことは、アメリカ工業の未発展=後進性を示すものであるが、他面において、「自由な」農村における広汎な家内工業の発展を地盤として急速な機械制工業の発展(熟練労働力不足を補充する機械の採用)がおこなわれたのである。従って、アメリカでは工場制により大幅に駆逐されるのは、手工業者層というよりは、むしろ農村家内工業であった。

2) R. M. Tryon, *Household Manufactures in the U. S.*, 1640—1860, p. 1.

3) V. S. Clark, *History of Manufactures in the U. S.*, vol. I, pp. 438, 440, なお Clark は自家用家内工業を homespun manufacture とよんでいる。

4) household manufacture に市場向生産を含めるか否かを問題としても大した意味がない。現実の歴史過程では、自家用と販売用家内工業は、しばしばオーバーラップしており、前者から後者へて発展する傾向

本稿では household manufacture を家内工業又は農村家内工業と呼び、次のように規定しておきたい。すなわち、household manufacture とは、自家用であれ市場向であれ自宅で家族労働を中心に営まれる工業である。その際特に次の諸点に留意する必要がある。

(1) household manufacture は主として農村(農家)で広く営まれている家内工業であり、農民的な家内工業又は農村家内工業と呼ぶにふさわしい工業である⁵⁾。

(2) household manufacture は、本来の手工業(handicraft)と一応区別される農家の副業的家内工業である。多くの場合半農半工的営業として営まれ、非熟練工程を農家の遊休労働力(特に婦人・子供)により行なわれた。しかしその中から本来の手工業者の分出・独立を妨げるものではなく、むしろより発展した工業諸形態発生の培養地盤となったことである。

(3) 家内工業製品は、地域や時代により多種多様⁶⁾であるが、特に重要な製品は各種織物(綿・羊毛・麻)であった。従ってここでは織物家内工業だけをとりあげることとする。

さて、この小論では、アメリカ産業革命の進展を、いわばその消極的側面である農村家内工業の没落という視点から考察したい。従って、産業革命の積極的側面=推進力たる工場制の発展(産業資本の成長)の問題は、必要な限りにおいて言及するにとどめたい。

II

初代財務長官 A. Hamilton は、有名な *Report on Manufactures* (1791) において次のように述べている。

にあったからである。

5) union of manufactures and farming (Tench Coxe) は 18 世紀から 19 世紀初にかけてのアメリカ工業の特色であった。次の Clark の指摘は興味深い。「1794 年 Tench Coxe は吾々の製造業者(manufacturers)を farmer-craftsmen として描き、1824 年 Zachariah Allen は village artificers と描いた。そして 1860 年には、彼らは急速に city operatives になったのである。」Clark, *op. cit.*, p. 463.

6) 家内工業製品としては、織物類の他、帽子、各種家具、釘などの生産必需品が多かった。cf. Tryon, *op. cit.*, chap. VI.

「多量の粗質織物、上衣用生地、サージ、フランネル、リンジー・ウールジー、羊毛や綿の靴下……が家内工業で(in the household way)製造されている。そして多くの場合、それをつくった家族用に十分なだけでなく、販売用に生産されている。またある場合には、輸出向にさえ生産されている。多くの地方では、その住民の衣料全体の 1/3 から 3/4、また 4/5 までもが、彼ら自身によって製造されていると見積られている⁷⁾。」

この Hamilton の報告書に記されているように、農村家内工業は植民地時代以来、アメリカ工業の主要な形態として全国に広く普及していた。Tench Coxe も 18 世紀末に「家内工業は殆どすべての農民やプランター、村や町の大部分の住民の家で営まれている⁸⁾」と述べている。また 1810 年財務長官 Gallatin の報告書においても、次のように記されている。「綿、亜麻又は羊毛でつくられる織物の大部分は、個々の家族で(in private families)製造されており、その大半は自家用であり、一部は販売用である。……都市の外に住んでいる住民が着ている衣料の約 2/3 は、家内工業製品である⁹⁾」と。

このように、独立後のアメリカにおいても、農村家内工業は益々普及・発展し、「家内工業の広大な景観」(Hamilton)を呈していた。ところが、1815 年の第 2 次対英戦争の終結後頃から、一部の地方では「家内工業の驚くべき減少¹⁰⁾」が叫ばれるようになり、その後この傾向は次第に拡がっていった。それでは、この重大な変化はなぜ生じたのであろうか。

家内工業の没落の決定的要因は、いうまでもなく 1810 年代から急速に発展してきた繊維工業における工場制度の発展である。周知のように、アメリカにおける工場制度は、1791 年 Samuel Slater による綿紡績工場の成功を発端とし、19 世紀前半にはニュー・イングランドを中心にめざましい発展をとげた。例えば、木綿工場は 1809 年にはわずか 62 工場(約 3 万鍾)にすぎなかったが、1830 年には 795 工場(約 120 万鍾)へ、1860 年には 1,091 工場(約 520 万鍾)と飛躍的な発展をとげた¹¹⁾。そして工

場の立地も、ニュー・イングランドから中部諸州、更には西部にも拡大していった。毛織物工業においても、木綿工業にややたちおくれながらも、工場制への移行が進行した¹²⁾。

繊維工業部門における機械制工場の急速な発展は、不可避免的に旧来の農村家内工業に打撃を与え、その没落を促進せずにはいなかった。しかしながら、こうした工場制の発展は、必ずしも一義的に農村家内工業の衰退を惹起したのではなかった。と云うのは、初期工場(いわゆる「ロード・アイランド型」紡績工場)では、生産工程の一部(紡績工程など)のみが機械化されたにすぎず、残余の工程(特に織布工程)はなお手労働に依存する家内工業で営まれたからである¹³⁾。それ故、農村家内工業は、初期工場の補充部分として残存したのみならず、逆に増大させたのである。

他方において、工場制の発展にも拘らず、農村家内工業の没落を遅延させた条件が存在していた。それは、絶え間のない「西漸運動」による西部開拓の進展であった。すなわち、「西漸運動」は西部に繰返し農村地帯を創出し、フロンティア農民の不可欠の補充物としての自給的家内工業をたえず復活・再生産していった。この拡大する西部での家内工業の復活は、東部先進地域における農村家内工業の没落を相殺し、全国的な家内工業の没落を遅延させる原因となった¹⁴⁾。

こうした家内工業の没落を阻害・遅延させる条件があったにもかかわらず、資本主義的生産は、頑強な家内工業を徐々にしかし確実に分解させていった。特に農村家内工業に決定的打撃をを与え、その没落を促進したのは、1820~30 年代における力織機(power loom)の採用・普及であった。いわゆる「ウォルサム型」工場の出現は、準備→仕上工程に至るまで一貫して機械による生産を可能にし手織機に依存する従来の家内工業を駆逐・掃滅していった。

cf. C. F. Ware, *The Early New England Cotton Manufacture*, Chap. II, III, IV.

12) 毛織物工業においては、1810 年にわずか 24 工場であったものが、1820 年には約 100 工場、1840 年には 1420 工場へと発展した。Tench Coxe, *Statement of the Arts and Manufactures of the U. S. A. 1813*, II, p. 4. Clark, *op. cit.*, pp. 565, 570.

13) Clarks, *op. cit.*, pp. 439, 539—40; Ware, *op. cit.*, Chap. II, Cole, *op. cit.*, p. 97.

14) 全国家内工業生産額は、工場制の発展にも拘らず、絶対額では 1840 年(約 2,902 万ドル)から 1860 年(約 2,455 万ドル)に減少しているにすぎない。Tryon, *op. cit.*, p. 309.

7) S. Mckee, ed., *Papers on Public Credit, Commerce and Finance by A. Hamilton*, p. 222.

8) Tench Coxe, *A View of the U. S. 1795*, p. 370.

9) G. S. Callender, *Selections from the Economic History of the U. S.*, p. 453.

10) 戦後の外国製品の多量の流入と戦時中の工場制の発展は、東部海岸地方の家内工業に回復しがたい打撃を与えた。A. H. Cole, *The American Wool Manufacture*, vol. I, p. 183.

11) Callender, *op. cit.*, p. 451; M. T. Copeland, *The Cotton Manufacturing Industry of the U. S.*, p. 6.

農村家内工業の没落は、既に部分的には19世紀初頭から進行していたが、それが顕著となるのは、1820~30年代頃からである。ごく大ざっぱに云えば、家内工業の没落は、1815~30年に先進地域たるニュー・イングランドや中部諸州の東部で進行し、1830~60年には、西部及び南部に波及していった¹⁵⁾。そして1860年代には、一部の例外地域を除けば、農村家内工業の全面的没落が一応完了した。

Tryonによれば、家内工業から工場への移行は次の諸段階を通過したといわれる¹⁶⁾。

(1) 工場から完全に家内工業が独立した段階。(単純な家内工業の段階)

(2) 工場が家内工業を補充する段階。(家内工業を補充するものとして比較的熟練を必要とする工程が家内工業から独立する段階。fulling millやcarding-fulling millの段階。)

(3) 工場を家内工業が補充する段階。(紡績工程などが工場に吸収され、他の工程を家内工業に依存する段階。前述した初期工場の段階。)

(4) 工場が家内工業から独立する段階。(本格的な工場制成立の段階で、もはや工場は家内工業を必要としない程自立した段階。)

このTryonの家内工業の没落(=工場制の確立)の諸段階によれば、本格的な家内工業の没落は、(3)→(4)への移行により完了することとなる。この移行について興味ある史料を提供してくれるのは、いわゆるMcLane Report(1832)である。この報告書は、1824年から1830年にかけての家内工業の状態についてのアンケートを集録している。それによれば、以下の如くである。

「ニュー・イングランドでは、家内工業は全般的に放棄されている。女子労働はもっと有利な条件でやってくれる工場に移ってしまった。そして住民たちは一般に、彼らの消費する綿製品を、家内工業の代りに、製造

業者(manufacturers)により、ずっと安く供給されている¹⁷⁾。」(Warwick.(R. I)からの報告)

「このカウンティでは、家内工業はほんの少ししか営まれていない。labor-saving machineryが家で製造するよりもはるかに安く製品を供給するので、それを買う方がずっと有利だからである。〔家内工業で費されるのと〕同じ時間で、工場は家内工業で生産する量の少くとも10倍のものを生産するだろう¹⁸⁾」(Amesbury(Mass)からの報告)

このように、ニュー・イングランド諸州からの報告は、異句同音に、従来の家内工業が最近減少=衰退してきたことを報告している。そしてその原因として、工場制の発展により、より安価な工場製品がでまわり、家内工業製品を駆逐していったこと、及び従来の家内工業の主要労働力(婦人・子供)がより有利な工場に吸収されて行ったことを述べている。ここでは、工場が家内工業を駆逐・掃滅しつつあったことは明瞭である。こうした状態は、その程度は低いけれども、中部諸州の東部地方でもみられた¹⁹⁾。

ところが西部においては事情は全く異なっていた。例えば、西部ペンシルヴェニアからの報告は、「〔家内工業は〕非常に広汎に営まれており、1824年以来おそらく倍加してきた²⁰⁾」(Huntingdon(Pa.))と述べている。このように、西部ペンシルヴェニアを含めて西部では、1830年代になお家内工業は増大していたと考えられる²¹⁾。東部での減少と対照的に西部で家内工業が増加しているのは前述したように西部における小農民社会の再生産によるものである。特に当時の劣悪な交通事情は、工場製品の西部への流入を阻害し、自給的家内工業を復活させた。しかし、1830年代以降における西部内部での工場制の成長と交通手段の改善²²⁾(運河・鉄道の発達)は、西部の家

17) Documents Relative to the Manufactures in the U. S., 1833, Vol. I, p. 946.

18) Ibid., p. 78.

19) 例えばニュー・ヨーク州の場合、家内工業生産高(織物)は次の如く減少した。1825年(1,647万ヤード), 1835年(877万ヤード), 1845年(709万ヤード), 1855年(93万ヤード)。Tryon, op. cit., p. 305. cf. Cole, op. cit., pp. 184—85.

20) Documents, Vol. II, p. 335.

21) 「西部の人々の大多数は、彼ら自身の衣料を生産している。こうした慣習は農民の間では広く行なわれている」(1820年のHallの手紙) Cole, op. cit., pp. 187—88.

22) 交通の発達と家内工業の没落との関連については Cole, op. cit., p. 280の図を参照。

15) Tryon, op. cit., pp. 275—76; G. R. Taylor, The Transportation Revolution, p. 211.

16) Tryon, op. cit., p. 272. なおColeも手織物工業の家内工業→工場への移行について略同様の段階を考えている。このように、アメリカの経済史家たちは、しばしば household manufacture→factoryへの直接的移行を設定し、その中間にマニュヤ間屋制を介在させていない。このことは、アメリカではマニュヤは初期工場と重なりあって急速に工場制へ転化して行ったことを示している。それと同時に、広汎な household manufactureの展開を母胎として、その中から工場制が発生してきたことを示すものである。

内工業を急速に消滅させていった。西部は東部に対し一定の時間的落差を伴ないつつも、東部のあとを追っていたのである。

南部でも農村家内工業の没落傾向は基本的に変らなかったが、北部とはかなり異なった特色をもっていた。南部の家内工業は、プランテーション体制の成立にともなうて、北部の小農民的な家内工業とは異なる plantation manufacture²³⁾ として発展していった。すなわち、プランテーション内の需要(特に奴隷の必需品)を充足するための奴隷労働による自給的家内工業として発展していった。従って、北部の農村家内工業のように、その内部から工場を生み出しつつ、家内工業が解体する方向をとらなかった。南部の家内工業の解体=没落は、19世紀前半における綿花プランテーションの発展(モノカルチュア的構造の強化)と工業製品の外からの輸入依存によりもたらされた。つまり南部家内工業は、その中から工場制を生み出す豊かな展望を欠如し、いわば「外から」没落させられたのである。従って、「外から」の影響力の少ない南部の内陸部では、矮小化された貧農的家内工業が根強く停滞的に残存することとなった²⁴⁾。

以上、農村家内工業が、かなり著しい地域差を含みながら、1830年代頃より全面的な没落過程に入ったことを述べた。家内工業は、1850年代になると、殆んどすべての地域で「ますます例外的²⁵⁾」な存在となって行った。今1840年以降の家内工業の没落を示す指標として、1

	1840	1850	1860
	ドル	ドル	ドル
Mass	0.31	0.21	0.20
Conn	0.73	0.52	0.11
R. I.	0.47	0.18	0.04
N. J.	0.54	0.23	0.04
N. Y.	1.91	0.41	0.18
Pa	0.75	0.32	0.19
Va	1.97	1.52	0.99
N. C.	1.87	2.40	2.06
S. C.	1.56	1.36	1.16
Ala	2.80	2.51	1.88
Ohio	1.22	0.86	0.25
Ky	3.36	2.50	1.81
Ill	2.09	1.36	0.53
Mo	2.99	2.45	1.68
全国平均	1.70	1.18	0.79

23) plantation manufacture については、C. Bridenbaugh, *The Colonial Craftsman*, Chap. I; Cole, *op. cit.*, pp. 16—17 を参照。

24) cf. Cole, *op. cit.*, p. 186.

25) *Ibid.*, p. 281.

人当り家内工業生産額(全家内工業製品をふくむ)を、主要な州について示せば左の如くである²⁶⁾。

この表にみられるように、全国平均1人当生産額は、1840~60年間に1.7ドルから0.79ドルと1/2以下に低下し、主要州においても一様に減少している。特にニュー・イングランドや中部諸州では、1860年には20セント以下に低下し、もはや家内工業はネグリジブルな存在となっている。農村家内工業は、1860年にはもはや決定的に没落したと考えられる。このことは逆に云えば、アメリカにおける工場制工業が一応確立したことの反映と考えてよいだろう。

III

以上、吾々はアメリカにおける農村家内工業の没落過程を概観してきた。それによれば、農村家内工業は、かなり著しい地域差を伴ないながらも、1830年代頃から急激な没落=衰退をみ、1860年代には、アメリカ工業の中でネグリジブルな存在となっていた。この農村家内工業の没落を推進した力は、同時期における急速な工場制の発展であった。機械制工業は、その高度の生産力により、旧来の手労働に依存する家内工業を駆逐・没落させ、鞏固な農工結合を分解し、家内工業従事者を工場労働者に転化させた。農村家内工業の吊鐘は、アメリカの産業資本の勝利を告げるものであった。

しかしながら、この家内工業の掃滅者たる工場制(産業資本)そのものは、他ならぬ農村家内工業の広汎な展開を母胎として、その中から発生・成長してきたことを見落してはならない。つまり、農村家内工業は、その胎内から自らを否定する産業資本を生み出し、それにより解体させられたのである。この意味で、独立初期に農村家内工業を「国民的産業の貴重な部門」とよび、その発展の中にアメリカの経済的自立の方向を見出した Tench Coxe の眼は鋭い²⁷⁾。従ってアメリカの農村家内工業は、インドなどの家内工業のように、いわば「外から」(外国工業製品の競争により)没落させられたのではなく²⁸⁾、その内部から自らの敵対物を育成し、死滅していったといわねばならない。

26) Tryon, *op. cit.*, pp. 308—9.

27) Coxe, *A View of the U. S. A.*, p. 370. 拙稿「テンチ・コックスとアメリカ工業」(『経済学季報』第13巻第1・2号)を参照。なお、Tryonも家内工業が「産業的独立」のために重要な役割を果たしたことを強調している。Tryon, *op. cit.*, pp. 123, 142.

28) 但し南部の家内工業の没落は、「外から」の没落を辿ったと考えられる。(植民地型!)